

4 発生予察情報の発表

1) 情報（警報、注意報、特殊報、防除情報）の内容

(1) 警報

該当なし

(2) 注意報

番号	発令月日	対象作物	対象病害虫	情報内容
第1号	4月13日	麦類	赤かび病	<p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：やや多</p> <p>3. 注意報発令の根拠</p> <p>1) 本病は開花期から乳熟期に曇天、降雨が続き、比較的高温になると発生が増加する。本年は3月下旬以降、曇天、降雨が続いており、本病の発生が懸念される。</p> <p>2) 長崎海洋気象台が4月9日に発表した1か月予報では、向こう1か月の気温、降水量は平年並である。4月13日発表の週間天気予報では、曇雨天の日が多いと予想されており、本病の発生が多くなる可能性が高い。</p> <p>4. 防除上注意すべき事項</p> <p>1) 本年は出穂期が平年より早く、防除薬剤は予防効果が主体であるため、散布時期が遅れないように注意する。</p> <p>2) 感染時期は、感受性が高まる穂揃期から乳熟期であり、防除適期は穂揃期である。この時期に曇天、降雨が続く場合は、その7日後にもう一度防除を行う。</p> <p>3) 本病の発生は、収穫減、品質低下となるので必ず防除を行う。</p>
第2号	4月13日	ばれいしょ	疫病	<p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：やや多</p> <p>3. 注意報発令の根拠</p> <p>4月12日の調査の結果、107筆中11筆で発生を認めた。長崎海洋気象台が4月13日に発表した週間天気予報では、曇雨天の日が多いと予想されており、本病の発生が多くなる可能性が高い。</p> <p>4. 防除上注意すべき事項</p> <p>1) 本病は、発生後の曇雨天により、急激に病勢が進展・蔓延するので、圃場の見回りをを行い、発生に注意する。</p> <p>2) 薬剤防除は発生前から行い、発生を認めたら進展状況に応じて7～10日毎に散布する。</p>
第3号	7月16日	いちご	炭疽病	<p>1. 発生地域（対象地域） 県下全域</p> <p>2. 発生程度 やや多</p> <p>3. 注意報発令の根拠</p> <p>1) 7月上旬の巡回調査の結果、発病株率は1.2%（平年 0.4%）、発生圃場数は37筆中6筆であった。発病株率は6月の巡回調査より増加した。</p> <p>2) 病原菌の種類別では<i>Glomerella cingulata</i>による炭疽病の発病株率は0.2%（平成8～10年 発生を認めない）、<i>Colletotrichum acutatum</i>による炭疽病（俗称 葉枯炭疽病）の発病株率は1.1%（平成8～10年の平均 0.6%）であった。</p> <p>3) 長崎海洋気象台が7月16日に発表した1か月予報では気温、降水量は平年並と予想されており、本病の発生に好適である。</p> <p>4. 防除上注意すべき事項</p> <p>1) 降雨、特に風を伴う降雨後に病原菌が飛び散り、感染、発病しやすいので、薬剤防除を徹底する。</p> <p>2) 発病株は見つけしだい除去する。また、本病には2種類の病原菌が関与し、薬剤感受性など生態や防除対策がやや異なるので、病原菌の種類を明らかにして対処する。</p> <p>3) 茎葉の濡れ時間が長いと感染、発病しやすいので、連続した長時間の灌水はしない。また、圃場の排水をよくする。</p>

番 号	発令月日	対象作物	対象病害虫	情 報 内 容
第4号	7月16日	茶	クワシロカイ ガラムシ	<p>1. 発生地域 (対象地域) 県下全域</p> <p>2. 発生程度 多</p> <p>3. 注意報発令の根拠 越冬量は平年よりやや多く、その後増加し7月下旬の巡回調査の結果、寄生株率34.4% (平成8~10年の平均 1.4%)、寄生圃場数16筆中10筆であった。</p> <p>4. 防除上注意すべき事項 1) 第二世代は7月中~下旬、第三世代は9月上~中旬が発生時期である。しかし、地域や圃場により異なるので、ふ化状況を確認してから防除を徹底する。 2) 薬剤防除は、1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤に対する抵抗力が強くなるので、ふ化直後の幼虫に十分かかるように散布する</p>
第5号	9月16日	大豆、野菜 ・花き類	ハスモンヨト ウ	<p>1. 発生地域 (対象地域) 県下全域</p> <p>2. 発生程度 やや多</p> <p>3. 注意報発令の根拠 (1) 9月3半旬の県予察圃場 (諫早市) 調査の結果、大豆における寄生株率は2.4% (平年 49.8%)、1株当たり寄生虫数は1頭 (平年 2.5頭)、1a当たり白変か所数は1.3か所 (平年 9.5か所) であった。 (2) 9月上旬の巡回調査の結果、大豆における寄生株率は9.7% (平年 21.3%)、1株当たり寄生虫数は0.6頭 (平年 2.9頭)、1a当たり白変か所数は0.4か所 (平年 4か所) であった。 いちご (育苗床) における食害株率は7.4% (平年 6.6%)、寄生株率は0.3% (前年 1.5%)、食害発生圃場数は30筆中23筆であった。 (3) フェロモントラップ (諫早市) の誘殺量は、9月2半旬以降、急激に増加している。 (4) 気象予報によると、向こう1か月の平均気温は高く、本虫の発生に好適である。</p> <p>4. 防除上注意すべき事項 (1) 中老齢幼虫になってからでは薬剤効果が上がらないので、若齢幼虫期に防除を行う。 (2) 薬剤は薬液が虫体にかかるように十分量を散布する。</p>
第6号	9月16日	かんきつ (極早生温州)	カメムシ類	<p>1. 発生地域 (対象地域) 県下全域</p> <p>2. 発生程度 多</p> <p>3. 注意報発令の根拠 1) 予察灯 (諫早市) における誘殺量は、8月2半旬以降平年より多く推移し、さらに9月2半旬以降急増している。 2) 9月上旬の巡回調査の結果、かんきつ園への飛来は36筆中3筆で見られた。</p> <p>4. 防除上注意すべき事項 1) 着色が早い園は集中的に加害される可能性がある所以注意する。 2) 園内の飛来に注意し、有機リン剤または合成ピレスロイド剤で防除する特に園周辺にスギ、ヒノキの多いところでは注意する。</p>
第7号	10月15日	温州みかん	カメムシ類	<p>1. 発生地域 (対象地域) 県下全域</p> <p>2. 発生程度 やや多</p> <p>3. 注意報発令の根拠 1) 予察灯 (諫早市) における誘殺量は、9月6半旬まで平年より多く推移し、10月3半旬現在も平年よりやや多い。 2) 10月上旬の巡回調査の結果、かんきつ園への飛来は33筆中2筆で見られた。 3) 早生温州での被害が見られており、普通温州への飛来も懸念される。</p>

番号	発令月日	対象作物	対象病害虫	情報内容
		温州みかん	カメムシ類	4. 防除上注意すべき事項 1) 着色が早い園は集中的に加害される可能性があるので注意する。 2) 園内の飛来に注意し、合成ピレスロイド剤または有機リン剤で防除する特に園周辺にスギ、ヒノキの多いところでは注意する。

(3) 特殊報

番号	発令月日	対象作物	対象病害虫	情報内容
第1号	12月8日	トルコギキョウ	トルコギキョウ葉巻病(仮称)	<p>1. 発生物種 トルコギキョウ</p> <p>2. 病原ウイルス TYLCV (Tomato yellow leaf curl virus)</p> <p>3. 発生場所 大村市、西彼杵郡琴海町</p> <p>4. 発生状況及び発生確認 平成11年9月に琴海町、11月に大村市のトルコギキョウにおいて萎縮症状および葉巻症状を呈する生育異常株が発生した。 農水産省九州農業試験場および本県総合農林試験場による同定の結果、TYLCVが検出され、我が国では未記録の病害、トルコギキョウ葉巻病(仮称)であることが確認された。 本病の病原ウイルスは、本県において既に発生しているトマト黄化葉巻病の病原ウイルスと同一である。</p> <p>5. 病徴 発病株は、節間が縮み、萎縮する。葉は葉表側に巻き、小型化する。また葉脈の隆起や、まれに葉脈間がわずかに黄化する場合がある。以上の症状により商品価値が著しく低下する。</p> <p>6. 伝染方法 シルバーリーフコナジラミにより伝搬され、アブラムシ伝搬はしない。汁液伝染、種子伝染、土壌伝染はしない。経卵伝染については不明である。</p> <p>7. 防除対策 1) 収穫終了後の残渣、圃場周辺の雑草はシルバーリーフコナジラミの発生源となり、病原ウイルスの伝染源となる可能性があるため除去する。 2) 本病又はトマト黄化葉巻病発生地では、感染する可能性がある農作物への感染拡大に注意する。 3) 発病株は本病の伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、埋没または焼却処分する。 4) 施設開口部に1mm目の防虫網を張り、シルバーリーフコナジラミの侵入を防止する。</p> <p>8. TYLCVが感染する可能性のある植物 ナス科：トマト、タバコ、チョウセンアサガオ、オオセンナリ、イヌホウズキ リンドウ科：トルコギキョウ マメ科：インゲン、ヒラマメ キク科：ノゲシ、ヒャクニチソウ アオイ科：ウサギアオイ トウダイクサ科：ショウジョウソウ</p>

(4) 防除情報

番号	発令月日	対象作物	対象病害虫	情報内容
第1号	7月1日	水稻	コブノメイガウンカ類	<p>1. コブノメイガ</p> <p>1) 発生状況 6月9日に諫早市の早期水稻において若令幼虫の寄生を認めた。その後、6月23～28日にかけて飛来が見られた。</p>

番号	発令月日	対象作物	対象病害虫	情報内容																					
		水稲	コブノメイガ ウンカ類	<p>2) 今後の発生予想 第1世代及び第2世代のふ化揃期は、次のように予想される(表1)。</p> <p style="text-align: center;">表1 飛来時期と予想ふ化揃期</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>飛来時期</th> <th>第1世代ふ化揃期</th> <th>第2世代ふ化揃期</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>5月24日</td> <td>6月1～2半旬</td> <td>7月2～3半旬</td> </tr> <tr> <td>6月17～18日</td> <td>6月5～6半旬</td> <td>7月5～6半旬</td> </tr> <tr> <td>6月23～28日</td> <td>6月6～7月1半旬</td> <td>7月6～8月1半旬</td> </tr> </tbody> </table> <p>3) 防除対策 (1) 早期水稲 止葉出葉期を迎えるので、6月23～28日に飛来が多かった圃場では、第1世代ふ化揃期にあたる7月1半旬に防除を行う。その後の圃場における発生状況に注意し、発蛾最盛期の7～10日後に防除を行う。 (2) 普通期水稲 プリンス粒剤は約45日間の残効があるので、残効期間内の防除は必要ない。なお、プリンス粒剤を施用していない地域では、圃場における発生状況に注意し、発蛾最盛期の7～10日後に防除を行う。</p> <p>2. ウンカ類 1) 発生状況 ウンカ類の飛来は5月24日、6月17～18日、6月23～28日に見られた。</p> <p>2) 今後の発生予想 第1世代及び第2世代のふ化揃期は、次のように予想される(表2)。</p> <p style="text-align: center;">表2 飛来時期と予想ふ化揃期</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>飛来時期</th> <th>第1世代ふ化揃期</th> <th>第2世代ふ化揃期</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>6月17～18日</td> <td>7月1半旬</td> <td>7月5半旬</td> </tr> <tr> <td>6月23～28日</td> <td>7月2～7月3半旬</td> <td>7月6～8月1半旬</td> </tr> </tbody> </table> <p>3) 防除対策 (1) 早期水稲 稲体が大きいので株当たり10数頭寄生しても影響は少ない。発生が多い地域ではコブノメイガとの同時防除を行う。 (2) 普通期水稲 アドマイヤー粒剤は約60日間、プリンス粒剤は約45日間の残効があるので、飛来成虫及び次世代幼虫に対する防除は必要ない。</p>	飛来時期	第1世代ふ化揃期	第2世代ふ化揃期	5月24日	6月1～2半旬	7月2～3半旬	6月17～18日	6月5～6半旬	7月5～6半旬	6月23～28日	6月6～7月1半旬	7月6～8月1半旬	飛来時期	第1世代ふ化揃期	第2世代ふ化揃期	6月17～18日	7月1半旬	7月5半旬	6月23～28日	7月2～7月3半旬	7月6～8月1半旬
飛来時期	第1世代ふ化揃期	第2世代ふ化揃期																							
5月24日	6月1～2半旬	7月2～3半旬																							
6月17～18日	6月5～6半旬	7月5～6半旬																							
6月23～28日	6月6～7月1半旬	7月6～8月1半旬																							
飛来時期	第1世代ふ化揃期	第2世代ふ化揃期																							
6月17～18日	7月1半旬	7月5半旬																							
6月23～28日	7月2～7月3半旬	7月6～8月1半旬																							
第2号	7月2日	かんきつ	かいよう病 黒点病	<p>6月22日から連続して降雨が続き、29日は強風を伴った雨となっています。気象情報(平成11年7月1日 長崎海洋気象台発表)によると、少なくとも向こう1週間程度は曇りや雨の日が多いと予想されており、かんきつのかいよう病や黒点病の多発が懸念されます。下記の点に留意して、防除指導をお願いします。</p> <p>1. 防除対策 1) かいよう病 (1) 強風による傷から感染しやすいので、前年発生した園や病斑の見られる園では薬剤散布を行う。 (2) 薬剤はストレプトマイシン剤か銅水和剤(クレフノン加用)を散布する。なお銅水和剤は高温時に散布すると葉害が出やすいので注意する。 2) 黒点病 6月上中旬に防除を行った園では、薬剤の効果がなくなっている可能性があるため、次の防除を行う。 薬剤の残効(目安)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>累積降水量(mm)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>デラン剤</td> <td>250～300</td> </tr> <tr> <td>マンゼブ水和剤</td> <td>250～300</td> </tr> <tr> <td>マンネブ水和剤</td> <td>250～300</td> </tr> <tr> <td>ダイファー水和剤</td> <td>250～300</td> </tr> <tr> <td>その他の剤</td> <td>200</td> </tr> </tbody> </table> <p>(参考) 諫早市における降水量 6月22日～30日 400.0mm 7月1日 11.0mm</p>		累積降水量(mm)	デラン剤	250～300	マンゼブ水和剤	250～300	マンネブ水和剤	250～300	ダイファー水和剤	250～300	その他の剤	200									
	累積降水量(mm)																								
デラン剤	250～300																								
マンゼブ水和剤	250～300																								
マンネブ水和剤	250～300																								
ダイファー水和剤	250～300																								
その他の剤	200																								

番 号	発令月日	対象作物	対象病害虫	情 報 内 容
第3号	7月5日	いちご	炭疽病 うどんこ病	<p>6月下旬から降雨が続き、6月29日、7月2日には強風を伴った雨となっています。長崎海洋气象台が7月5日に発表した週間天気予報では、今後も曇雨天の日が多いと予想されており、炭疽病及びうどんこ病の発生が懸念されます。下記の点に留意して、防除指導をお願いします。</p> <p>1. 炭疽病 発病株は見つけしだい除去する。また、本病には2種類の病原菌が関与し、薬剤感受性など生態や防除対策がやや異なる（県防除基準99、170～171ページ参照）ので、病原菌の種類を明らかにして対処する。</p> <p>2. うどんこ病 1) 薬剤散布に当たっては、古葉の整理を行い、薬液が葉の裏に十分かかるように散布する。 2) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、作用機作の異なる薬剤をローテーション散布する（県防除基準261ページ参照）。</p>
第4号	7月16日	茶	チャノキイロアザミウマ	<p>茶のチャノキイロアザミウマの発生が多くなっています。このため、下記の点に留意して防除指導をお願いします。</p> <p>1. 発生状況 7月下旬の巡回調査の結果、チャノキイロアザミウマのたたき落とし（A4板に5回、2反復）虫数は68.6頭（平成8～10年の平均 8.9頭）と平年より多かった。</p> <p>2. 防除対策 更新園および三番茶摘採中止園については新芽の充実を図るため防除を徹底し、その他の園では三番茶摘採後直ちに防除を行い、夏期の増殖を抑える</p>
第5号	8月12日	かんきつ	ミカンハダニ	<p>1. 発生状況 今年は春先のミカンハダニの密度は低く、7月上旬までは寄生葉率は平年より少なく推移していたが、7月下旬から急激に増加した。8月上旬の巡回調査の結果、寄生葉率は27.8%（平年 8.4%）、発生園場率は80.6%（平年 36%）で平年より多い。</p> <p>2. 防除対策 (1) 盛夏期を過ぎて気温が低下してくると増殖率が高まるので、園内のハダニの密度に注意し、寄生葉率30～40%以下で防除する。 (2) 薬剤散布にあたっては、かけむらがないように十分量を散布する。 (3) 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統の薬剤は年1回使用を守る。</p>
第6号	9月3日	極早生温州	カメムシ類	<p>極早生温州園の一部でカメムシ類の飛来が見られています。飛来時期や飛来量は園により差があるので注意して下さい。</p> <p>1. 発生状況 (1) 予察灯（諫早市）における誘殺量は、8月1半旬までは平年より少なかったが、2半旬以降増加している。 (2) 極早生温州での被害は9月1半旬から多良見町及び聡徳町の一部の園で確認されている。</p> <p>2. 防除上注意すべき事項 (1) 着色が早い園は集中的に加害される可能性がある所以注意する。 (2) 園内の飛来に注意し、有機リン剤または合成ピレスロイド剤で防除する特に園周辺にスギ、ヒノキの多いところでは注意する。 (3) 合成ピレスロイド剤を散布すると、ミカンハダニが急激に増加することがあるので注意する。</p>
第7号	9月22日	極早生温州	背かび病 緑かび病	<p>9月中旬から天候不順が続いており、本病に対する薬剤の防除効果の低下が懸念されます。下記の点に留意して、防除指導をお願いします。</p> <p>防除対策 1) 薬剤は、ベフラン液剤25、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤を使用する。 なお、ベフラン液剤25は耐雨性が弱く、散布後の累積降水量が100mmを越える場合は、2回散布を行う。 農業安全使用基準等による収穫前使用期間は、ベフラン液剤25は7日前まで、トップジンM水和剤及びベンレート水和剤は前日までである。</p>

番 号	発令月日	対象作物	対象病害虫	情 報 内 容																		
		極早生温州	青かび病 緑かび病	<p>2) 収穫時の傷から発病しやすいので、果実にハサミ傷等をつけないよう丁寧に扱う。</p> <p>3) 選果を徹底する。</p>																		
第8号	10月15日	早生温州	青かび病 緑かび病 褐色腐敗病	<p>9月24日の台風18号により傷害果が発生しています。また、気象予報（長崎海洋気象台10月8日発表）によると向こう1ヶ月の降水量は多い見込みであり、青かび病、緑かび病の発生が増加することが予想されます。</p> <p>また、一部の園では褐色腐敗病が台風時の強風雨により発生しています。下記の点に留意して、防除指導をお願いします。</p> <p>防除対策</p> <p>1) 青かび病、緑かび病</p> <p>(1) 薬剤防除 下表の薬剤により防除を行う。なお、ペフラン液剤25は耐雨性が弱く散布後の累積降水量が100㎜を超える場合は、2回散布を行う。</p> <table border="1" data-bbox="794 651 1238 804"> <thead> <tr> <th>薬剤名</th> <th>収穫前使用期間</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ペフラン液剤25</td> <td>7日</td> </tr> <tr> <td>トップジンM水和剤</td> <td>前日</td> </tr> <tr> <td>ベンレート水和剤</td> <td>前日</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) 収穫時の傷から発病しやすいので、果実にハサミ傷等をつけないよう丁寧に扱う。</p> <p>(3) 選果を徹底する。</p> <p>2) 褐色腐敗病</p> <p>(1) 本病により落下している果実は園外へ除去する。</p> <p>(2) 既に発生している園では下表の薬剤により防除を行い、蔓延を防止する</p> <table border="1" data-bbox="794 999 1238 1178"> <thead> <tr> <th>薬剤名</th> <th>収穫前使用期間</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アリエッティ水和剤</td> <td>前日</td> </tr> <tr> <td>リドミル銅水和剤</td> <td>14日</td> </tr> <tr> <td>トモオキシラン水和剤</td> <td>30日</td> </tr> <tr> <td>デランフロアブル</td> <td>30日</td> </tr> </tbody> </table>	薬剤名	収穫前使用期間	ペフラン液剤25	7日	トップジンM水和剤	前日	ベンレート水和剤	前日	薬剤名	収穫前使用期間	アリエッティ水和剤	前日	リドミル銅水和剤	14日	トモオキシラン水和剤	30日	デランフロアブル	30日
薬剤名	収穫前使用期間																					
ペフラン液剤25	7日																					
トップジンM水和剤	前日																					
ベンレート水和剤	前日																					
薬剤名	収穫前使用期間																					
アリエッティ水和剤	前日																					
リドミル銅水和剤	14日																					
トモオキシラン水和剤	30日																					
デランフロアブル	30日																					